



桃だより 2・3月合併号



農家の方は、鎌をもって仕事をします。鎌は素人には扱いづらいものだといわれますが、使い慣れると、非常に勝手のよいものだそうです。ある農家の方は、このようにおっしゃいます。

「最初、私は鎌を扱おうと必死に努力したんですよ。それは、もう毎日、ひたすら鎌を振るい続けました。でも、扱いづらいのです。これが。」

後から思い起こすと、ある頃から、鎌を振る腕に力が要らなくなってきました。はじめは筋肉でもついたのかと喜びました。しかし、違ったのです。私の腕に本当に力が入らなくなっていたのです。あ、病気とかではありませんよ。力を入れなくなったのです。その頃になると、なんとなく鎌の“声”というかなんと言うか、そういったものが聞こえてくる気がしたのです。そして気がつきました。なんだか鎌が動きを教えてくれているような気がしたのです。それに気がついてから、鎌を握るのが楽しくなってきました。

今となっては、鎌を無理に扱おうという気はありません。鎌は、鎌の動きがあるんです。特に、何をか思う必要がなくなりました。ただ、黙々と鎌を振るう、鎌に任せて振るうだけです。それ以上のことはありません。」

少し、変な言い方ですが、鎌は鎌の形をしています。それは、代々数千年もの時間をかけて、その形になっていきました。おそらく、そこには“使いやすさ”という視点が存在していたのではないのでしょうか。

農家の方と鎌の話は、弓と弓引きとの間にもいえるのではないのでしょうか。弓には、弓の“声”があるように思います。人が弓を扱おうと思えば、弓は本来の動きがとれなくなるように思います。弓にも弓も動きがあるのだと思います。農家と鎌、弓引きと弓。決して遠く異なるものとは思えません。